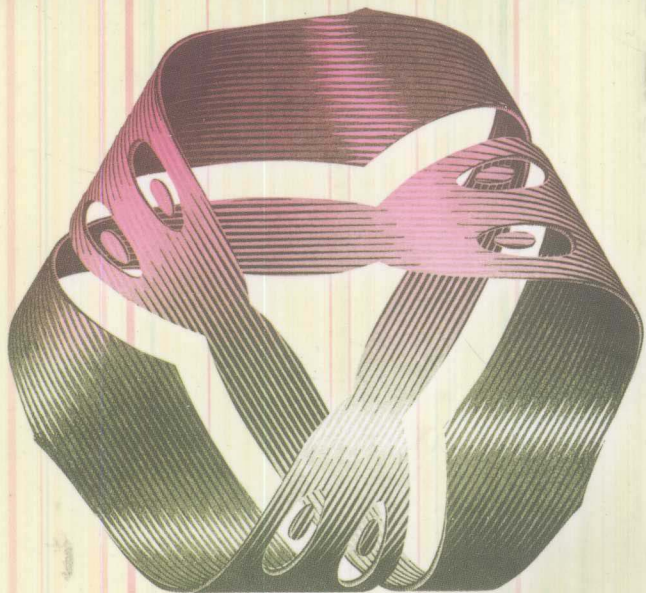




# ジェンダーは 超えられるか

.....新しい文学批評に向けて

武田悠一 編

彩流社

# ジェンダーは 超えられるか

.....新しい文学批評に向けて

武田悠一編

彩流社

ジェンダーは超えられるか——新しい文学批評に向けて

2000年3月31日 発行

定価は、カバーに表示してあります

編 者 武 田 悠 一

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2

電話 03 (3234) 5931 FAX 03 (3234) 5932

<http://www.sairyuusha.co.jp>

e-mail:sairyuusha@mtg.biglobe.ne.jp

組版 野 ば ら 社

印刷 (株)平河工業社

製本 (株)三森製本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-88202-639-2 C0090

ジェンダーは超えられるか／目次

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

序論 ジェンダーを読みなおす 武田悠一 5

I ジェンダー・ポリティックス 53

1 幻想の少女——L・M・モンゴメリの『赤毛のアン』 角田信恵 55

2 D・H・ロレンスと世紀末の性幻想——『虹』をめぐる 加藤洋介 79

3 母の呪縛——『黙秘』における母性と語り 平林美都子 97

4 へまなざしへの異性愛——ヒッチコックの『めまい』 武田悠一 113

5 サバルタンは語ることもできる

——G・C・スピヴァクの「語りかける」批評 鶴殿えりか 139

II 異装とジェンダー 161

6 異装のジェンダー——『十二夜』を読む 石塚倫子 163

7 クロサワの異性装——ジェンダーで読む戦後日米関係 岩田和男 183

8 ポリティカル・ボディとしての『M・バタフライ』 武田美保子 219

### Ⅲ クイア・セクシュアリティ 237

9 身体をして語らしめよ——ダフニ・マラーットのレズビアン言語 平林美都子 239

10 義務としての結婚

——オスカー・ワイルドの「アーサー・サヴィル卿の犯罪」 角田信恵 257

11 郷愁のレズビアニズム——『孤独の井戸』トライアングル 武田美保子 273

あとがき 293

執筆者紹介 297

## 凡例

- 一、文献からの引用ページ数は、文中の（ ）内に著者名とアラビア数字（同じ著者の文献が複数ある場合は、著者名、書名あるいは論文名とアラビア数字）によって示したが、前後の文脈から判断して文献名があきらかな場合はページ数のみを示した。
- 二、本文と注のなかで取り上げる文献に関する情報は、各論末尾の文献一覧に示した。
- 三、引用文中の「」内の語句は、引用者による注ないし補足を示す。

# 序論

## ジェンダーを読みなおす

武田  
悠一



## I ジェンダー理論とフェミニズム批評

### ジェンダー概念の導入

「ジェンダー」という言葉が、性差をあらわす概念用語としてフェミニズム内部で使われるようになったのは、一九七〇年代以降のことである。上野千鶴子が言うように、それ以来、「性差をめぐる議論は、大きなパラダイム・チェンジを被ることになった」(「差異の政治学」1)。もともと文法上の性別をあらわす文法用語であった“gender”という語が、「生物学的性差」としての「セックス」とは別の、「社会的、文化的に構築される性差」を示す概念としてフェミニズムに導入されたのは、「自然的とされ、したがって変えることのできないとされていた性差を相対化するため」であった。(『ジェンダー』という用語は性差を「生物学的宿命」から引き離すために、不可欠な概念装置としての働きをした。もし「性差」が、社会的、文化的、歴史的に作られるものであるなら、それは「宿命」とは違って、変えることができる。フェミニズムは「女らしさ」の宿命から女性を解放するために、性差を自然の領域から文化の領域に移行させた。)(1・2) まず、ジェンダーという概念は、一種の「解放」の理論として導入されたということを確認しておきたい。

「生物学的・解剖学的」性差 (sex) から「社会的・文化的」性差 (gender) を区別することによって、フェミニズムは性差や性役割の相対性を語ることができるようになった。性差というものはたしかに存在する。しかし、それは二つの次元(セックスとジェンダー)をもつものであり、一律に生物

学的決定論に回収すべきものではない。かりにセックスが生物学的・生得的に獲得される変更不能なものであったとしても、ジェンダーは社会的構築物である限りにおいて変更可能であり、また変更しなくてはならない。「ジェンダー」という概念を導入することによってフェミニズムが獲得してきた認識は基本的にはほぼこうしたものであったといえてよい。

しかし、このセックス／ジェンダーという二分法は、「肉体／精神、あるいは自然／文化という、近代西洋的観念図式をあまりにもあからさまに反復するもの」(加藤 191)であるだけでなく、セックスを生物学的な所与とし、ジェンダーをその上に文化的に構築される偏差として位置づけることによって、ジェンダーの相対的自由を主張する一方で、セックスというカテゴリーを、かえって自然的な決定論のなかに閉じ込めてしまう。

他方でまた、この二分法は八〇年代のアメリカを中心にして、「ジェンダー本質主義」とでもいうべきものを生み出した。これは性差を文化の構築によるものとみなす点では「構成主義」(constructionism)だが、ジェンダーの文化的拘束力は容易に克服できないと考える点では「本質主義」(essentialism)である。<sup>(2)</sup>《彼女たちは、「解剖学的宿命」は拒絶するが、かわりにジェンダーの社会化過程や「女性文化」のなかで形成され受け継がれる「女性性」を、今度はおとしめるかわりに賞賛する。これは生物学的(セックス)本質主義にかわって、ジェンダー本質主義とでもいうべきものである。》(「差異の政治学」8)この文化的本質主義、別名「女性原理派」は、支配する性である男に対する支配される性、女の「逆説的な優位」を説く。女と男は違った文化を与えられ、違った声で語るだけでなく、ある意味では女の文化の方が、たとえば自然や生命への「女らしい」共感という点で男より優れている。こうした前提にたつて、「女性の領域」「女性文化」が再発見され、「シスターフッド」「女性

同士の連帯」や母性、家庭が再評価される。しかし、このジェンダー本質主義は、ジェンダー間の支配・被支配という権力関係を温存したままで価値の逆転をはかったにすぎず、「男社会の壁の厚さに絶望」したフェミニストたちの、「従来のラディカル・フェミニズムからは後退した、保守的な思想」（『差異の政治学』10）といわざるをえない。

また、ジェンダー概念の導入が、女性にとって「女らしさ」からの「解放」を目指すものであったとすれば、それは男にとっても「男らしさ」からの「解放」をもたらすものでなければならぬ。たとえば、一九八九年に『男らしさとアメリカン・ルネッサンス』を出版したデイヴィッド・レヴェレンツは、その序文のなかで「ある程度のジェンダー役割の逆転は、過去十五年間の中上流階級のアメリカの男性にとってごく普通のこと」であったと述べているが、問題はそうしたジェンダー役割の逆転ないしはジェンダー観の変容が、男たちの意識に何をもたらしたかである。レヴェレンツは書いている。

私の部分的な役割逆転が私の本の読み方に影響を与えているのを意識したのは、『緋文字』を教えていたクラスで、ディムズデルが子育ての責任をまんまと免がれていることにたいして、突然怒りがこみあげてきたときだった。そのとき、私は四歳の子供の世話に忙殺されていた。私の妻は法律の大学院を終えて新しいキャリアをはじめたばかりだった。……どうして世の母親たちは子供を窓から投げ出してしまわないのだろうか？ 私のディムズデルに対する怒りにはたんなる羨望以上のものがあつた。男はそうしようと思えば、一日中書き物をするこゝろだってできる。だが、子育てという私の体験が——伝統的な男以上に、伝統的な女以下ではあつたが——『緋文字』という作品

を新たな目で読むように促したのだ。……以前なら、デイズデールが娘の気まぐれに腹を立てて、「私を愛しているなら、この子を静かにさせてくれ」とヘスターに言う場面を気にもとめなかった。今では、私はどうしてもある結婚式のことを思い出してしまふ。そこで私の親類の一人が泣きわめく自分の子供を見下ろし、やおら彼の妻を睨みつけて、「君の子が泣いているぞ」と言ったものだ。ぞっとするけれども、魅惑的でもある、性役割の分割。私はそうした役割分割が厳格に感じられる家庭に育った。そして、仕事での競争に生き残るための男らしさという定義が、依然として私のなかに溶岩のように、深く深く潜伏していた。(Leverenz 6)

### テクストのジェンダー化

分析カテゴリーとしてのジェンダーがフェミニズム批評の内部でも使われるようになったのは、およそこの頃である。当時アメリカのフェミニズム批評の中心的存在であったエレイン・ショウォルターは、やはり一九八九年に発表された「わたしたち自身の批評」の中で、それまでのフェミニズム批評の流れをたどったうえで、これからのフェミニズム批評は「ジェンダー理論」に向かっていくとして、次のように言っている。

フェミニズム批評にとって、ジェンダー理論の利点は何であろうか？ もっとも意義深いジェンダー理論の主張は、すべての書きもの——つまり女性による書きものに限らずということだが——はジェンダー化されている、というものである。フェミニズム批評の目的を文学のディスコースにおけるジェンダーの分析と定義してみると、扱うテクストの範囲が一挙に拡大する。この定義にし

たがうと、中性「中立」的で、ジェンダーにとらわれていないようにみえる文学理論にも、ジェンダーにまつわる暗黙の仮定があることを暴きたてることもできる。第二に、「ジェンダー」という用語は人種と同じく、支配的なものを問うことになる。ジェンダー理論は男性性という主題をフェミニズム批評に導入し、かくして男性をこの分野に導き入れることを約束する——研究者、学者、理論家、批評家として。そのこともあって、すでにフェミニズム批評は男性の同性愛についての考察をもふくむようになってきている。この点では、イヴ・コソフスキー・セジウィックの草分け的な業績とゲイの男性たちの書きものの両方が大いに貢献しているだろう。第三に、ジェンダーを基本的分析のカテゴリとして文学批評に加えることにより、フェミニズム批評は周辺から中心へと押し出され、わたしたちの読み方、書き方にラディカルな変革をもたらす潜在的 가능성이生まれる。ジェンダーの観点を取り入れると、自分たちの生活やテキストの構造を決定するほかの差異のカテゴリをも、わたしたちはつねに意識することになるからだ。それはちょうど、ジェンダーを理論化することによって、フェミニズム批評とそれ以外の少数派グループの批評の刷新とのつながりが明らかにになるとまったと同じである。("A Criticism of Our Own" 367)

同じ一九八九年にショウォルターは『ジェンダーを語る』を編集・出版して、ジェンダー理論によるフェミニズム批評の実践を呈示してみせた。ここには、レヴェレンツの論文も収録されている。ここに集められた多様な批評的いとなみを、あえて一言でくくるとすれば、それは「テキストのジェンダー化」と呼びうるものであろう。フェミニズム批評による、この「テキストのジェンダー化」は、フェミニズム批評内部へのジェンダー理論のたんなる応用というよりは、むしろジェンダー理論の展

開をさらに一歩前進させるものであったといっている。あらゆる言語はジェンダーの刻印を帯びている（「ジェンダー」という用語がもとと言語を性によって分類する文法的形式であった）、それゆえ、あらゆるテクストにはジェンダーがあるということ。ジェンダーを超えた中立的な言語はありえない、一見中立的にみえる、あるいは中立を装う言説とは、じつは「女性的」として有標化された言語を排除し、みずからを規準とし普遍化する、男の言説にはかならない。そこでは「ジェンダー中立性」が抑圧的に機能しているのだ。<sup>(3)</sup> フェミニズム批評へのジェンダー概念の導入は、それまでほとんど問われることのなかった「男性性」という問題、「男らしさ」の概念を問い直すという観点の導入でもあった。

シウォオルターが右の引用のなかで「中性」「中立」的で、ジェンダーにとらわれていないようにみえる文学理論にも、ジェンダーにまつわる暗黙の仮定があることを暴きたてることもできる」批評として言及しているのは、『ジェンダーを語る』にも集録されているバーバラ・ジョンソンの「ジェンダー理論とイエール学派」（一九八四年）である。この論文は、ジョンソンがそれまでみずからの批評の基盤としてきたディコンストラクション（イエール学派）の言語分析ないしはレトリック分析を、そっくりそのままのディコンストラクションの批評的言説に投げ返すとき、それもまたけつして“gender-free”ではなく、イエール（Yale）学派もまた男性（male）学派であった、との自己批判を含んでいる。この自己批判の身振りを、シウォオルターは、ジョンソンのイエール学派（脱構築派）からのフェミニストとしての「独立宣言」として読むのだが（*Speaking of Gender* 8）、わたしはこれを、ディコンストラクションを通過したフェミニズム批評による、ジェンダー理論の新たな展開への貢献と考えたい。<sup>(4)</sup>

## ジェンダーのテクスト化

イエールの脱構築派が「自分でも知らないうちに」語ってしまったのは、「ジェンダーの問題は言語の問題である」ということだ、とジョンソンは言う（*A World of Difference* 37）。ジェンダーの問題は言語の問題であり、言語の問題はジェンダーの問題であるということ。ジェンダーは決して本来の「固有の（proper）ものではなく、言語によって、言説によって、レトリックによって、形成される構築物であるということ。とすれば、問題は〈男／女〉という性差そのものであるというより、むしろ男／女を切り分ける差異化という行為そのものであり、この差異化がはらむ政治性、「ジェンダー関係の権力的な非対称性」である。《男／女の二項は、男でなければ女、女でなければ男、というたんなる排他的な二項関係ではない。この二項は非対称的につくられていて、その実、項のあいだに互換性はない。男 *man*, *homme* はいつも人間を代表し、男を標準として女 *woman*, *femme* はそれとの差異化においてのみ定義される。女はつねに差異をもった性として有徴化される。》（上野「差異の政治学」12）

フェミニズム批評は、女という「しるしつきのジェンダー」がどのように表象されてきたかを明らかにするだけでは十分ではなく、そうした表象を生み出してきた「言説のジェンダー」を問題にしなければならぬ。あたかも中立＝中性的（*gender-free*）であるかのように装っている言説をジェンダー化しなければならない。ジョンソンが言うように「みずからがあたかもジェンダーをもたないかのように巧妙に装う男性言語のなかでは、女の消去はごく自然なこととしておこなわれるため、それに抵抗するにはただものを書く女になるだけでは十分ではない」（41）のだ。ジェンダー理論を導入

することによってフェミニズム批評が立ち向かうことになったこの課題を、イヴ・コソフスキー・セジウィックは「読みのジェンダー・ポリティックス」と呼んで、次のように定式化している。

フェミニストの読者としていまわたしたちは学んでいる。あるテクストの二項対立——たとえば、自然対文化、私的なもの対公的なもの、肉体対精神、受動性対積極性——は、文化・歴史の特定の圧力のもとで、男と女の関係を暗に指し示すアレゴリーを発見するための格好の場となっていることを。そしてそれ以上に、名目上はジェンダー化されていない構築物を、ジェンダーの観点から分析しそこなうとしたら、そのこと自体が読みのジェンダー・ポリティックスにおいてきわめて偏向的な動きになりうること。これによって、わたしたちは、文化的に「しるしづけられている」ジェンダー（女性）が作者やテーマとして現前していないテクストのなかでさえもジェンダーの問いを発する術をもてるようになった。（*Epistemology of the Closet* 34）

こうした動きは文学批評の枠組みを超えて共有されるようになる。たとえば、ジョーン・スコットの『ジェンダーと歴史学』（一九八八年）は歴史学そのものを「ジェンダー化」しようとしている。ジェンダーを「肉体的差異に意味を付与する知」と定義したうえで、スコットはその「差異の意味づけ」の政治性を問題にする。すなわち、「ジェンダーのようなヒエラルヒーがどのようにして構築され、あるいは正当化されるのか」を問う。スコットによれば、こうした問いを可能にしたのはポスト構造主義の認識論、つまり意味の政治学である。ジェンダーが「どのようにして」意味づけられるかを問うことは、その意味を生み出す「レトリックや言説」を分析することであり、バーバラ・ジョンソン



が「テキストそのものの内部にある意味作用の闘争」(The Critical Difference 5)と呼ぶものを注意深く析出することである。

「脱構築」と呼ばれるこの分析は、「意味が生み出されてくる闘争の過程」、意味が排除と抑圧をとおして構築される過程を明らかにしようとする。そして、ジェンダーという意味が排除的な操作によって構成されるということが理解されるならば、その構成と排除の操作を追跡することが政治的にぜひとも必要になるはずだ、というのがスコットの立場である。とすれば、スコットにとって「歴史のジェンダー化」とは、同時に「ジェンダーの歴史化」でもなければならぬ。《歴史家としての私は、性差に対して付与される意味が可変的で矛盾していること、これらの意味が作りあげられたり異議申し立てがおこなわれたりする政治的過程、「女」と「男」というカテゴリーのもつ不安定性と融通性、およびこれらのカテゴリーが、つねに首尾一貫していたりいつも同じやり方ではないが、互いにどのように相手の存在をとおして明確化されるかを指摘することによって、ジェンダーを歴史化することにとくに関心をもっている。》(スコット 28-29)

スコットは「女と男をつねに同じやり方で固定された、普遍的で自己再生産しつづける二項対立と定義する」考え方を批判し、その非歴史性、本質主義への傾斜を論難する。スコットにとってジェンダー分析がなすべきは、「二項対立のもつ固定的で永続的な性格を拒否し、性差の条件を真に歴史化し、脱構築することなのだ(72)。「テキストのジェンダー化」もまた、同時に「ジェンダーのテキスト化」である。テキストをジェンダー化することは、それを男／女という「固定された、普遍的な二項対立」に押し込めることなく、むしろ男／女という差異化そのものを、あるいはそこには含まれる差異の政治学を、テキストとして分析すること、ジェンダーを「解説」すべきテキストとして